レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ	システマティックレビュー	
タイトル情報	論文の英語タイトル	A systematic review of treatment modalities for primary basal cell carcinomas	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（1）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ13-1Web	
書誌情報	研究デザイン	Ⅰ．システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ．1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ．非ランダム化比較試験による Ⅳ．分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ．記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ．患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅰ ）	
	Pubmed ID	10522664	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Arch Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	135	
	号	10	
	ページ	1177-83	
	ISSNナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　(1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　(2)	
	発行年月	1999年	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Thissen MR	Maastricht Medical Center
	その他著者1	Neumann MH	同上
	その他著者2	Schouten LJ	Comprehensive Cancer Center

レビュー研究の6項目	目的	基底細胞癌の治療法別再発率を検討する
	データソース	MEDLINE、EMBASE、CANCERLIT
	研究の選択	基底細胞癌に対し、通常の切除術、Mohs 手術、Cryosurgery、Electrodessication、放射線療法、Immunotherapy、Photodynamic therapy を施行した研究を選択。
	データ抽出	298 文献は抽出。言語、病理学的確定がついていない症例が含まれる、遡及的研究、経過観察が5年未満、50例未満の報告、レビュー、重複投稿、整容性の報告の論文を除外し、18文献が残った。
	主な結果	再発率 Mohs 手術：1.1%、通常の切除：5.3%、Cryosurgery：4.3%、Curettage および Electrodessication：13.2%、放射線療法：7.4%、Immunotherapy：21.4%
	結論	報告の仕方（解析法）が異なるため、治療法別の再発率の違いを単純に比較できない。Mohs 手術は大きな腫瘍、危険領域に発生した morphea-type の腫瘍には用いるべきである。結節性や表在性の小さな腫瘍では、通常切除術が用いられるべきである。他の治療法は手術が適応とならない症例に用いる。Immunotherapy と photodynamic therapy は研究段階の治療である。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	師井　洋一
	レビューワーコメント	基底細胞癌の治療法別に再発率を検討した貴重なデータ レベルⅠ

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Evidence-based review of the use of cryosurgery in treatment of basal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ13-2Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ．システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ．1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ．非ランダム化比較試験による Ⅳ．分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ．記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ．患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅰ ）	
	Pubmed ID	12786697	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Dermatol Surg	
	雑誌 ID		
	巻	29	
	号	6	
	ページ	566-571	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 2 ）	
	発行年月	2003	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kokoszka A	St. Luke's-Roosevelt 病院
	その他著者1	Scheinfeld N	同上
	その他著者2		
	その他著者3		
	その他著者4		
	その他著者5		
	その他著者6		
	その他著者7		
	その他著者8		
	その他著者9		
	その他著者10		

レビュー研究の6項目	目的	基底細胞癌に対する凍結療法をシステマティックレビューする
	データソース	MEDLINE, EMBASE, CancerLit, Cochrane Databse
	研究の選択	基底細胞癌に対する再発率、整容的結果について記述したもの 他の皮膚癌を含めたものは除外
	データ抽出	13の非対称研究と4の他の治療法とのランダム化試験
	主な結果	症例蓄積研究が多く、エビデンスのレベルは低かった。ほとんどの報告が結節型、表在型で 2cm 以下と低リスクの症例を選んでいるものの、再発率は 10%以下と良好な結果を示していた。整容的には手術療法が優るとの報告が1報あったが、凍結療法で良好との報告が多かった。
	結論	凍結療法の局所再発率は 10%以下と報告されているが、その評価は多くは臨床的な評価であり（病理学的検討なし）、また1年という観察期間の短いものもあり、注意を要する。整容的には多くの報告者が良好としている。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	師井　洋一
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅰ ） 凍結療法のシステマティックレビューである。報告者の多くが、結節型および表在型の基底細胞癌を対象としているので、これらの低リスク症例には安価で簡便な凍結療法は基底細胞癌の治療として有用である。また、2回の凍結サイクルが推奨される。しかし、予後不良な浸潤型に対してのエビデンスはない。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Recurrence rates of treated basal cell carcinoma. Part 2: Curettage-electrodesiccation	
	論文の日本語タイトル	基底細胞癌の再発率：第２報：掻爬と電気凝固	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ14-1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID	1820764	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Dermatol Surg Oncol	
	雑誌 ID		
	巻	17	
	号	9	
	ページ	720-6	
	ISSN ナンバー	0148-0812	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1991	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Silverman MK	Department of Dermatology, New York University School of Medicine
	その他著者 1	Kopf AW	
	その他著者 2	Grin CM	
	その他著者 3	Bart RS	
	その他著者 4	Levenstein MJ	
	その他著者 5		
	その他著者 6		

一次研究の８項目	目的	基底細胞癌に対する掻爬と電気凝固の有用性（再発に関与する因子）を評価する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	New York 大学 Skin and Cancer Unit	
	対象者	1955~1982 年に受診した原発 BCC（未治療例）に対して、掻爬と電気凝固を施行した 2314 症例が登録	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 14 ）	
	介入（要因曝露）	掻爬と電気凝固	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	5 年再発率	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他（ 3 ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	① 部位別の 5 年間の再発率は、1955～1982 年の 2314 例について 低リスク部位（頚部、体幹、四肢）：8.6% 中リスク部位（被髪頭部、前額、前、後耳介部、頬骨部）：12.9% 高リスク部位（鼻、鼻側部、鼻唇溝部、耳、頸、口囲、眼周囲）：17.5% ② 1973～1982 年の 521 例に関しては、大きさも加味すれば 低リスク部位：すべての直径で 5 年再発率が 3.3% 中リスク部位：直径 10 ㎜以下 5.3%、10 ㎜以上で 22.7% 高リスク部位：直径 6 ㎜以下 4.5%、6 ㎜以上で 17.6% ③ 患者の年齢、性、罹病期間は再発率に影響を与えなかった。	
	結論	解剖学的部位に関わらず直径 6 ㎜以下の BCC、大きい腫瘍なら解剖学的部位を選択すれば掻爬と電気凝固治療は有用である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	神谷秀喜	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 我国では C&E は一般的ではないが、症例を選択して施行すれば有用性が高い。多数の症例解析であり、再発危険因子のデータとしても信頼度は高い。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Curettage and electrodesiccation in the treatment of midfacial basal cell epithelioma	
	論文の日本語タイトル	顔面正中部の基底細胞上皮腫に対する掻爬・電気凝固治療	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ14-2Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID	6853782	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Am Acad Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	8	
	号	4	
	ページ	496-503	
	ISSN ナンバー	0190-9622	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1983	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Salasche SJ	Dermatology service, Department of Medicine, Brooke Army Medical Center
	その他著者 1	Colonel MC	
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	高リスク部位である顔面正中部（鼻、鼻唇溝）の基底細胞上皮腫に対する掻爬・電気凝固治療	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	Brooke Army Medical Center	
	対象者	100 例の BCC 患者　未治療で結節型ないし結節潰瘍型であり、発生から 2 年以内、直径 1cm 以下、前治療なしという条件を満たす。	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 14 ）	
	介入（要因曝露）	C&E 治療	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	局所の腫瘍残存率	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	高リスク部位である顔面正中部（鼻、鼻唇溝）の BCC に対して掻爬・電気凝固治療を行った場合、十分な治療を行ったにもかかわらず 30%に腫瘍の残存がみられ、一方その他の頭頚部では 12%にとどまった。 組織学的には有毛部では腫瘍が毛包に沿って下方に進展していることがあった。	
	結論	C&E 治療は、高リスク部位である鼻・鼻唇溝部位には行うべきではない。この部位では根治が難しく、整容的機能的障害を残すこともあり、むしろ MMS が推奨される。有毛部では取り残すことになるのでこれを行うべきではない。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	神谷秀喜	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 厳選した症例に対して C&E 療法を行い、治療効果を判定してかつ残存腫瘍の組織学的検討加えているので、エビデンスレベルは高い。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Photodynamic therapy using topical methyl aminolevulinate vs surgery for nodular basal cell carcinoma. Results of a multicenter randomized prospective trial	
	論文の日本語タイトル	アミノレブリン酸外用光線力学療法と外科療法の比較．多施設によるランダム化比較試験	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ15-1web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ．システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ．1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ．非ランダム化比較試験 Ⅳ．分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ．記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ．患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅱ ）	
	Pubmed ID	14732655	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Archives of Dermatology	
	雑誌 ID		
	巻	140	
	号	1	
	ページ	17-23	
	ISSNナンバー	pISSN 0003-987X　eISSN 1538-3652	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 2 ）	
	発行年月	2004	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Rhodes LE	Royal Liverpool University Hospital
	その他著者1	de Rie M	
	その他著者2	Enstrom Y	
	その他著者3	Groves R	
	その他著者4	Morken T	
	その他著者5	Goulden V	
	その他著者6	Wong GA	
	その他著者7	Grob JJ	
	その他著者8	Varma S	
	その他著者9	Wolf P	

一次研究の8項目	目的	結節型基底細胞癌に対するアミノレブリン酸外用光線力学療法（PDT）の有用性を、標準的治療である外科療法と比較検証する	
	研究デザイン	ランダム化比較試験	
	セッティング	大学病院数施設(イギリス、オランダ、スウェーデン、フランス、オーストリア)	
	対象者	初回治療の結節型基底細胞癌患者 101 例（成人）	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　（ 14 ）	
	介入（要因曝露）	PDT 52 例と外科的切除 49 例に割り付け。PDTはアミノレブリン酸 160mg/g 外用と 75 J/cm²の赤色光（570-670nm）照射を 1 週間隔で 2 回施行。3 ヵ月後に反応のなかった 13 例には再度施行。	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	3 ヵ月後の臨床的な完全奏効率	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2	12 ヵ月後の　〃	1.主要 2.副次 3.その他（ 2 ）
	3	24 ヵ月後の　〃	1.主要 2.副次 3.その他（ 2 ）
	4	3、12、24 ヵ月後の整容効果	1.主要 2.副次 3.その他（ 2 ）
	主な結果	3 ヵ月の時点で 97 患者の 105 病変が評価可能であり、臨床的な完全奏効率は PDT 91%（48/53）、外科的切除 98%（51/52）で統計学的に有意差なし（p=0.25）。12 ヵ月後の完全奏効率は PDT 83%（44/53）、外科的切除 96%（50/52）でやはり有意差なし（p=0.15）。24 ヵ月後には PDT でさらに 5 例、外科的切除で 1 例が再発。整容効果については、患者自身による評価では 12、24 ヵ月後で有意に PDT が優れ（p<0.05）、第三者による評価では 3、12、24 ヵ月後のいずれにおいても PDT が有意に優れていた（p<0.001）。	
	結論	PDT は結節型基底細胞癌に対する有用な治療法である。外科療法に比べて再発率の高い傾向はみられたが、整容効果においては有意に優れていた。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	竹之内辰也	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（II） 基底細胞癌における介入研究の中では、標準治療である外科的切除を対照としている数少ない論文である。12 ヵ月後の完全奏効率は統計学的な有意差は得られていないが、率として 13%の差は無視できず、外科的切除に比較して「再発しやすい傾向はある」と表現している。しかし、PDT は整容効果において外科的切除よりも有意に優れていたことと、正常組織の犠牲が少ない、手技が簡単である、などを理由に結節型基底細胞癌の治療法として PDT は有用である、と著者らは結論付けている。	

)

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Photodynamic therapy vs. cryotherapy of basal cell carcinomas: results of a phase III clinical trial	
	論文の日本語タイトル	基底細胞癌に対する光線力学療法と凍結療法の比較：第三相臨床試験	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ15-2web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ．システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ．1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ．非ランダム化比較試験 Ⅳ．分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ．記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ．患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅱ ）	
	Pubmed ID	11298545	
	医中誌 ID		
	雑誌名	British Journal of Dermatology	
	雑誌 ID		
	巻	144	
	号	4	
	ページ	832-840	
	ISSNナンバー	pISSN: 0007-0963　eISSN: 1365-2133	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 2 ）	
	発行年月	2001	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Wang I	Lund University Hospital
	その他著者1	Bendsoe N	
	その他著者2	Klinteberg CAF	
	その他著者3	Enejder AMK	
	その他著者4	Andersson-Engels S	
	その他著者5	Svanberg S	
	その他著者6	Svanberg K	
	その他著者7		

一次研究の8項目	目的	基底細胞癌に対する光線力学療法（PDT）の有用性を凍結療法との比較により検証する	
	研究デザイン	ランダム化比較試験	
	セッティング	1 大学病院（スウェーデン）	
	対象者	組織学的に確認された基底細胞癌 88 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　（ 14 ）	
	介入（要因曝露）	アミノレブリン酸外用 PDT と凍結療法（液体窒素スプレー法、凍結－融解 2 サイクル）に割り付け。残存があれば追加治療。	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	1 年再発率（組織学的）	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2	整容効果	1.主要 2.副次 3.その他（ 2 ）
	3	治療耐用性（治癒期間、疼痛等）	1.主要 2.副次 3.その他（ 2 ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	主な結果	組織学的な 1 年再発率は PDT が 25%（11/44）、凍結療法が 15%（6/39）、臨床的な 1 年再発率はそれぞれ 5%（2/44）、13%（5/39）であり、統計学的な有意差は認めなかった。残存による追加治療を要したのは PDT で 30%（13/44）、凍結療法で 3%（1/39）であったが、多くは 1 回のみの追加であった。PDT の方が治癒までの期間が有意に短く、整容効果も優れていた。	
	結論	治療効果の点では、PDT は凍結療法に匹敵するものであった。追加の治療はより必要であったが、治癒までの期間と整容面では PDT の方が優れていた。	
	備考	表在型 36 例、結節型 39 例。病型別にみても PDT と凍結療法の再発率の有意差はなし。	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	竹之内辰也	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（II） 再発の評価が全例組織学的に行われているために、データとしての精度は高い。部位別では 54%が体幹の症例であり、比較的再発リスクの低い部位の症例が中心であったことには留意する必要がある。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Imiquimod 5% cream for the treatment of superficial basal cell carcinoma: results from two phase III, randomized, vehicle-controlled studies	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ16-1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅱ ）	
	Pubmed ID	15097956	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Am Acad Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	50	
	号	5	
	ページ	722-733	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2004	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Geisse J	Solano Dermatology Associates
	その他著者 1	Caro I	Harvard 大学
	その他著者 2	Lindholm J	Dermatopathology Associates
	その他著者 3	Golitz L	Dermatopathology Servise LLC
	その他著者 4	Stampone P	3M Phamaceuticals
	その他著者 5	Owens M	同上
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		

一次研究の８項目	目的	表在型基底細胞癌に対する 5% imiquimod クリームの有効性と安全性	
	研究デザイン	２重盲検ランダム化比較試験	
	セッティング	米国における多施設共同	
	対象者	724 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 15 ）	
	介入（要因曝露）	5% imiquimod 外用 6 週間 5 回／週または 7 回／週 vehicle 外用 6 週間 5 回／週または 7 回／週 治療終了 12 週後に臨床・病理学的評価	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	治療後 12 週での臨床・病理評価	1.主要 2.副次 3.その他（1）
	2	副作用と局所の皮膚反応	1.主要 2.副次 3.その他（2）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	5% imiquimod 複合消失率（臨床・病理学的）；5 回／ vs 7 回／週：75% vs 73% 組織学的消失率; 5 回／ vs 7 回／週：82 % vs 79%	
	結論	表在型基底細胞癌に対し 5% imiquimod クリーム 6 週間外用は有用である。5 回／週または 7 回／週で統計学的有意差はなかったので、5 回／週が推奨される。副作用も局所の刺激感が主体で安全性にも問題はない。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	師井 洋一	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（II） 表在型基底細胞癌に対し 5% imiquimod クリーム 6 週間、5 回／週外用は安全で有用である。他の治療法との比較試験はないものの、十分考慮されるべき治療法と考えられる。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Open study of the efficacy and mechanism of action of topical imiquimod in basal cell carcinoma.	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ16-2Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ III ）	
	Pubmed ID	15347339	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Clin Exp Dermatol.	
	雑誌 ID		
	巻	29	
	号	5	
	ページ	518-25	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2004	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Vidal D	de la Santa Creu i Sant Pau 病院
	その他著者 1	Matias-Guiu X	同上
	その他著者 2	Alomar A	同上
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	基底細胞癌に imiquimod クリームは有用か	
	研究デザイン	非ランダム化比較試験（オープン試験）	
	セッティング	1 病院	
	対象者	8mm 以上の基底細胞癌 55 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 2 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 15 ）	
	介入（要因曝露）	35 例 3 回／週外用 8 週間 20 例 5 回／週外用 5 週間	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	2 年後の再発率	1.主要 2.副次 3.その他（1）
	2	組織中のアポトーシス細胞の数	1.主要 2.副次 3.その他（2）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	3 回 vs 5 回 / total 完全寛解率 80% (28/35) vs 65% (13/20) / 75 % (41/55) 表在 100% (2/2) vs 100% (2/2) / 100% (4/4) 結節 83% (5/6) vs 100% (2/2) / 88% (7/8) 浸潤 77% (21/27) vs 56% (9/16) / 70% (30/43)	
	結論	Imiquimod クリームは表在型で 100%、結節型で 88%と極めて高い寛解率を示し、浸潤型においても 70%と十分有用である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	師井 洋一	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（III） オープン試験であるが浸潤型にも比較的良好な結果を示した研究。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Surgical excision vs Mohs' micrographic surgery for basal-cell carcinoma of the face: randomised controlled trial	
	論文の日本語タイトル	顔面の基底細胞癌に対する外科的切除とMohs法のランダム化比較試験	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ17-1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅱ ）	
	Pubmed ID	15541449	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Lancet	
	雑誌 ID		
	巻	364	
	号	9447	
	ページ	1766-1772	
	ISSNナンバー	pISSN: 0140-6736　eISSN: 1474-547X	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 2 ）	
	発行年月	2004	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Smeets N	University Hospital Maastricht
	その他著者1	Krekels G	
	その他著者2	Ostertag J	
	その他著者3	Essers B	
	その他著者4	Dirksen B	
	その他著者5	Nieman F	
	その他著者6	Neumann H	
	その他著者7		

一次研究の8項目	目的	顔面基底細胞癌に対する外科的切除とMohs法の有用性を比較検証する	
	研究デザイン	ランダム化比較試験	
	セッティング	オランダの1大学病院と1総合病院	
	対象者	顔面の基底細胞癌（初発397病巣と再発201病巣）	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　（ 22 ）	
	介入（要因曝露）	外科的切除（3mmマージン、断端陽性であればさらに3mm離して追加切除）とMohs法に無作為割り付け	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	再発	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2	整容効果	1.主要 2.副次 3.その他（ 2 ）
	3	手術関連コスト	1.主要 2.副次 3.その他（ 2 ）
	主な結果	初発例：平均観察期間2.66年の中で外科的切除群の6病巣とMohs法群の3病巣が再発。30ヶ月の時点では、外科的切除群171病巣中5病巣（3%）、Mohs法群160病巣中3病巣（2%）が再発（p=0.724）。 再発例：平均観察期間2.08年の中で外科的切除群の8病巣とMohs法群の2病巣が再発。18ヶ月の時点では、外科的切除群95病巣中3病巣（3%）が再発、Mohs法群は93病巣中再発なし（p=0.119）。 整容効果：外科的切除とMohs法で有意差なし 手術関連コスト：初発、再発とも外科的切除群の方が有意に低コストであった。	
	結論	Mohs法の方が外科的切除に比べ再発率は低かったが、有意差には至らなかった。	
	備考	Intention to treat analysis	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	竹之内辰也	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（II） 従来の基底細胞癌に関する臨床研究は再発に関して低リスクの症例を対象としたものが多いが、本研究では顔面基底細胞癌の中でも径10mm以上で発生部位や組織型においても高リスクの症例を対象としている点は意義が大きい。 初発例、再発例のいずれにおいても外科的切除とMohs法による再発率の有意差は得られていないが、再発例の方が初発例に比べ差が大きい傾向はみられた（p値0.119と0.724）。再発性基底細胞癌においてはMohs法は有力な治療法と考えられる。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Comparison of treatment modalities for recurrent basal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル	再発性基底細胞癌に対する治療法の比較	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ17-2Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅲ ）	
	Pubmed ID	424458	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Plastic and Reconstructive Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	63	
	号	4	
	ページ	492-496	
	ISSNナンバー	pISSN: 0032-1052　eISSN: 1529-4242	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 2 ）	
	発行年月	1979	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Sakura CY	Roswell Park Memorial Hospital
	その他著者1	Calamel PM	
	その他著者2		
	その他著者3		
	その他著者4		
	その他著者5		
	その他著者6		
	その他著者7		
	その他著者8		
	その他著者9		
	その他著者10		

一次研究の8項目	目的	再発性基底細胞癌に対する複数の治療法の有効性を比較検討する	
	研究デザイン	非ランダム化比較試験	
	セッティング	米国の1総合病院	
	対象者	再発性基底細胞癌97例（多発例は除く）	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　（ 14 ）	
	介入（要因曝露）	1）放射線療法35例（病変の境界より1cm以上含めて、45～55Gy） 2）Mohs法40例（固定法） 3）外科的切除20例（切除マージンの記載なし、25%は術中迅速病理併用） 4）治療なし2例 に非ランダムに割り付け	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	再々発	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	主な結果	5年以上の経過観察期間で、最終的な再々発率は放射線で11%、Mohs法で12%、外科的切除で5%であり、症例全体では9.7%であった。	
	結論	再発性基底細胞癌に対しては、放射線療法、Mohs法、外科的切除のいずれの治療も有用であった。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	竹之内辰也	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（III） 治療法を割り付けた基準が示されていないために、これら3通りの治療法による今回の再々発率を単純に比較することは出来ないが、フォロー期間も5年以上とされておりデータの信頼度は高い。本研究におけるMohs法は固定法であるが、現在欧米で普及しているMohs法は凍結組織を用いるものが標準となっている。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Multivariate risk score for recurrence of cutaneous basal cell carcinomas	
	論文の日本語タイトル	基底細胞癌における再発リスクの多変量解析	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ18-1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID	6847215	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Archives of Dermatology	
	雑誌 ID		
	巻	119	
	号	5	
	ページ	373-377	
	ISSN ナンバー	pISSN: 0003-987X eISSN: 1538-3652	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1983	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Dubin N	New York University School of Medecine
	その他著者 1	Kopf AW	
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		

一次研究の8項目	目的	基底細胞癌の再発に関わる危険因子を同定する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	米国の1大学病院	
	対象者	基底細胞癌 1417 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	治療法別に掻破＋電気乾固（C & E）、放射線（X 線）、外科的切除の3群に分け、それぞれ年齢、性別、前治療、腫瘍径、襞腫状変化、部位を説明変数とし、再発を目的変数とした多重ロジスティックモデルを構築。	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	再発	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	治療後5年時点での症例全体の再発率は 18.3%。外科的切除は 9.3%、放射線は 9.7%、C & E は 26.0%であった。多重ロジスティックモデルの結果で有意であった因子は、外科的切除では腫瘍径と部位（頭部、耳介、眼瞼、鼻、その他顔）、放射線では腫瘍径と部位（鼻）、性別（男）、C & E では腫瘍径、部位（前額、耳介、眼瞼、鼻、その他顔）、前治療、年齢であった。	
	結論	治療法に関わらず、腫瘍径と発生部位はいずれの治療群においても有意な再発危険因子であった。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	竹之内辰也	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（IV） ニューヨーク大学における基底細胞癌の一連の報告の1つ。対象期間が 1955～1969 年と古いために C & E の症例が多くなっているが、外科的切除の再発データは現在でも十分適用可能である。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	**Recurrence rates of treated basal cell carcinomas. Part 2: Curettage-electrodessication**	
	論文の日本語タイトル	基底細胞癌の再発率。パート2：C & E	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ18-2web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID	1820764	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Journal of Dermatologic Surgery and Oncology	
	雑誌 ID		
	巻	17	
	号		
	ページ	720-726	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1991	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Silverman M	Department of Dermatology, New York University School of Medicine
	その他著者 1	Kopf A	
	その他著者 2	Grin C	
	その他著者 3	Bart R	
	その他著者 4	Levenstein M	
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		

一次研究の8項目	目的	C & E 治療後の基底細胞癌の再発に関与する因子を検討する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	米国の大学病院	
	対象者	初回治療基底細胞癌 2314 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	Curettage-electrodessication	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	5年再発率	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	比例ハザードモデルによる多変量解析では、腫瘍径、高危険部位（鼻、鼻周囲、鼻唇溝、耳介、下顎、口囲、眼囲）、中危険部位（頭部、前額、耳前、耳後、頬）、治療時期（1955-1963）が独立した有意な再発予測因子であった。 頭部、体幹、四肢の低危険部位では腫瘍径に関わらず C & E は有効で、5年再発率は 3.3%であった。中危険部位で 10mm 未満の場合の5年再発率は 5.3%、高危険部位で 6mm 未満の場合は 4.5%であった。	
	結論	6mm 未満の基底細胞癌に対しては、高危険部位であっても C & E は有用である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	竹之内辰也	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（IV） ニューヨーク大学による一連の報告の1つである。本邦では C & E は普及していないが、症例の選択によっては有用性が示唆されている。症例数が多くフォロー期間も長いため、再発危険因子のデータとしても信頼度は非常に高い。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	**Recurrence rates of treated basal cell carcinomas. Part 4: X-ray therapy**	
	論文の日本語タイトル	基底細胞癌の再発率。パート4：放射線療法	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ18-3Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID	1624628	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Journal of Dermatologic Surgery and Oncology	
	雑誌 ID		
	巻	18	
	号	7	
	ページ	549-554	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 2 ）	
	発行年月	1992	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Silverman M	Department of Dermatology, New York University School of Medicine
	その他著者1	Kopf A	
	その他著者2	Gladstein A	
	その他著者3	Bart R	
	その他著者4	Grin C	
	その他著者5	Levenstein M	
	その他著者6		
	その他著者7		

一次研究の8項目			
	目的	放射線治療後の基底細胞癌の再発に関与する因子を検討する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	米国の大学病院	
	対象者	「標準的方法」で初回放射線治療を実施した基底細胞癌 862 例（1955－82）	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　（ 22 ）	
	介入（要因曝露）	放射線療法（X 線照射）	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｺｰﾑ）	エンドポイント	区分
	1	5 年再発率	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	主な結果	症例全体の 5 年再発率は 7.4%。再発症例 211 例に対して行った場合の 5 年再々発率は 9.5%であり、有意差はみられなかった。比例ハザードモデルによる多変量解析では、腫瘍径のみが独立した有意な再発予測因子であった。頭部で腫瘍径 10mm 未満の場合の 5 年再発率は 4.4%、10mm 以上の場合は 9.5%であった。治療者側による整容効果の評価として、good もしくは excellent 判定は 63%で、C & E の 91%、外科的切除の 84%よりも劣っていた。	
	結論	放射線療法は頭頸部の症例であっても 10mm 未満であれば有効性は高い。手術困難な高齢者などには適用しやすい。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	竹之内辰也	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（IV） ニューヨーク大学による一連の報告の 1 つである。症例数が多くフォロー期間も長いため、再発危険因子のデータとしても信頼度は非常に高い。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Recurrence rates of treated basal cell carcinomas. Part 3: Surgical excision	
	論文の日本語タイトル	基底細胞癌の再発率。パート3：外科的切除	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ18-4Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID	1592998	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Journal of Dermatologic Surgery and Oncology	
	雑誌 ID		
	巻	18	
	号	6	
	ページ	471-476	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 2 ）	
	発行年月	1992	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Silverman M	Department of Dermatology, New York University School of Medicine
	その他著者1	Kopf A	
	その他著者2	Bart R	
	その他著者3	Grin C	
	その他著者4	Levenstein M	
	その他著者5		
	その他著者6		
	その他著者7		

一次研究の8項目			
	目的	外科的切除後の基底細胞癌の再発に関与する因子を検討する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	米国の大学病院	
	対象者	初回治療基底細胞癌 588 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　（ 22 ）	
	介入（要因曝露）	外科的切除（切除マージンの記載なし）	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｺｰﾑ）	エンドポイント	区分
	1	5 年再発率	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	主な結果	症例全体の 5 年再発率は 4.8%。比例ハザードモデルによる多変量解析では、部位（頭部）、性別（男）が独立した有意な再発予測因子であった。 5 年再発率は、頭部、体幹、四肢は 0.7%、頭部で腫瘍径 6mm 未満は 3.2%、頭部で 6－9mm は 8%、頭部で 10mm 以上は 9%であった。整容効果としては、非再発症例のうちの 85%で good から excellent の評価であった。	
	結論	外科的切除は頭部以外においては極めて有効な治療法である。再発危険部位である頭部においても、5mm 以下の病変であれば高い治癒率が期待できる。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	竹之内辰也	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（IV） ニューヨーク大学による一連の報告の 1 つである。症例数が多くフォロー期間も長いため、再発危険因子のデータとしても信頼度は非常に高い。	

レビュー研究用フォーム		データ入力欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Long-term recurrence rates in previously untreated (primary) basal cell carcinoma: implications for patient follow up	
	論文の日本語タイトル	未治療の原発 BCC に対する長期再発率：患者フォローアップの意味	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ19－1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1 つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ. 非ランダム化比較試験による Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ 1 ）	
	Pubmed ID	2646336	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Dermatol Surg Oncol	
	雑誌 ID		
	巻	15	
	号	3	
	ページ	315-28	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1989	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Rowe DE	Texas Health Science Center
	その他著者 1	Carroll RJ	Texas A and M university
	その他著者 2	Day CL Jr	Texas Health Science Center
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の 6 項目	目的	各種の治療法で治療を行った基底細胞癌の適切な経過観察期間を検討した		
	データソース	記載なし		
	研究の選択	除外項目は①20 例未満の報告 ②SCC との区別をしていない報告 ③クライオサージェリーの報告（通常の 3 倍の再発率） ④断端陽性例で適切な処置が行われていない報告例		
	データ抽出	外科的切除 37 報告、放射線 31 報告、クライオ治療 14 報告、electrodesiccation 21 報告、Mohs 手術（MMS）3 報告を抽出した。		
	主な結果		経過観察 5 年未満	5 年以上
		手術	2.8%	10.1%
		Electrodesiccation	4.7%	7.7%
		放射線療法	5.3%	8.7%
		クライオ	3.7%	7.5%
		MMS 以外の療法	4.2%	8.7%
		MMS	1.4%	1.0%
		再発時期：3 年までに 66%が再発し、6～10 年に 18%が再発した。		
	結論	基底細胞癌では 5 年での成績を基準に考える。		
	備考			
レビューワーコメント	レビューワー氏名	神谷秀喜		
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅰ ） 再発した BCC の論文を網羅しており、そこから導かれた治療選択に関する結論は有用である。		

一次研究用フォーム		データ入力欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Risk of another basal cell carcinoma developing after treatment of a basal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル	1 つの BCC の治療後に別の BCC が発生するリスクについて	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	BCCCQ19－2Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1 つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID	8425966	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Am Acad Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	28	
	号	1	
	ページ	22-8	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1993	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Marghoob A	Perelmann Department of Dermatology, New York University School of Medicine, and Oncology Section
	その他著者 1	Kopf AW	
	その他著者 2	Bart RS	
	その他著者 3	Louis Sanfippo	
	その他著者 4	Silverman M	
	その他著者 5	Peter Lee	
	その他著者 6	Elie Levy	
	その他著者 7	Vossaert KA	
	その他著者 8	Sandhya Yadav	
	その他著者 9	Michelle Abadir	
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目	目的	1 つの BCC の治療後に別の BCC が発生するリスクについて検証。		
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究		
	セッティング	大学病院		
	対象者	組織学的に BCC と診断された 260 例の白色人種		
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 2 ）		
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）		
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 15 ）		
	介入（要因曝露）			
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分	
	1	BCC の初回発生	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）	
	2	BCC の二次発生	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）	
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）	
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）	
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）	
	主な結果	260 例中 137 例について、最初の BCC 発生から平均 38.3 ヶ月で新しい BCC が発生した。1 個以上の二次的新規発生 BCC は 5 年間の累積頻度で 45.2%であった。これは 5 年再発率よりも有意に高値であり、さらに全米の一般人における 5 %という頻度と比しても有意に高かった。		
	結論	BCC の既往がある患者では、次の新たな BCC が発生する頻度が高く長期間のフォローアップが必要である。		
	備考			
レビューワーコメント	レビューワー氏名	神谷秀喜		
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 多数症例の追跡調査であり、東洋人の実際の頻度と比較してもかなりの高値である。		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Photodynamic therapy for the treatment of extramammary Paget's disease	
	論文の日本語タイトル	光線力学療法による乳房外パジェット病の治療	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ5-1Web	
書誌情報	研究デザイン	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ⅠⅤ）	
	Pubmed ID	12072068	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Br J Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	146	
	号	6	
	ページ	1000-1005	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 2 ）	
	発行年月	Jun 2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Shieh S	Department of Dermatology, Roswell Park Cancer Institute
	その他著者 1	Dee AS	
	その他著者 2	Cheney RT	
	その他著者 3	Frawley NP	
	その他著者 4	Zeitouni NC	
	その他著者 5	Oseroff AR	
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		

一次研究の 8 項目			
	目的	乳房外パジェット病における PDT の有用性を調べる	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	Department of Dermatology, Roswell Park Cancer Institute	
	対象者	5 人の男性乳房外パジェット病患者 16 病巣、うち 11 病巣は外科治療後の再発病巣	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　（ 2 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　（ 15 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　(5)	
	介入（要因曝露）	ALA 外用 PDT	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	腫瘍の退縮	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	主な結果	16 病巣中 8 病巣に 6 カ月後の時点で腫瘍の完全退縮(CR)を認めたが、うち 3 病巣は 9-10 カ月後に再発した。効果が不十分な 1 例ではフォトフィリンの全身投与による PDT を施行し CR が得られた。	
	結論	乳房外パジェット病の治療に PDT が有用である	
	備考		
	レビューワー氏名	八田尚人	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 複数例の乳房外パジェット病の治療に PDT を施行した数少ない報告。有効率が 50%、再発率が 38%。再発率が高いが、繰り返し治療することで局所のコントロールを行っている。有用性の根拠として手術療法後の再発率 31-61%と比較しているが、本邦の報告と比べ極めて高いので信頼性に欠ける。	

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ	文献レビュー	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extramammary Paget's disease: prognosis and relationship to internal malignancy	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ1-1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ. 非ランダム化比較試験による Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ Ⅰ ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Am Acad Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	13	
	号		
	ページ	1009-14	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 2 ）	
	発行年月	1985	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Chanda JJ	Division of Dermatology, Holmes Regional Medical Center
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の 6 項目		
	目的	乳房外パジェット病の予後と合併内臓悪性腫瘍についての文献レビュー
	データソース	Medline
	研究の選択	不明
	データ抽出	1962 年から 1982 年までの英文論文からの 196 例と自験例 1 例の計 197 例
	主な結果	乳房外パジェット病は高齢女性に多く、発生頻度は女性外陰部、肛門周囲の順であった。26%が原病あるいは合併内臓癌で死亡。24%が皮膚腺癌を深部に合併、そのうち 46%が死亡。内臓癌合併例は全体で 29%、同時合併例（乳房外パジェット病診断の前後 1 年以内に組織学的に診断）は 12%。肛囲発生例は消化管腺癌、陰茎・陰嚢・尿径発生例は泌尿生殖器癌、女性外陰部発生例は乳癌および泌尿生殖器癌との部位相関があった。
	結論	乳房外パジェット病は高率に内臓癌を合併し、部位相関性がある。乳房外パジェット病では、消化管および泌尿生殖器系の精査を施行するべきである。
	備考	合併内臓癌として、子宮頸癌（扁平上皮癌・腺癌）、膀胱癌（移行上皮癌・腺癌）、前立腺癌、腎臓癌、卵巣腺癌、直腸腺癌、総排泄腔癌、バルトリン腺癌、乳癌が記載されている。
レビューワーコメント	レビューワー氏名	清原隆宏
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅰ ） 乳房外パジェット病と合併内臓癌の部位相関性に関する優れた総説であるが、内臓癌の同時合併の定義を乳房外パジェット病診断前後 1 年以内に組織学的に診断された場合としており、生物学的に正確なデータではない可能性がある。 厳密にはシステマティック・レビューではないが、多数例を詳細に検討しており、現時点ではそれに準ずるものと評価した。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外 Paget 病	
	タイプ	文献レビュー	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extramammary Paget's disease.	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ1-2Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ. 非ランダム化比較試験による Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅰ ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	BJOG	
	雑誌 ID		
	巻	112	
	号		
	ページ	273-9	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2005	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Shepherd V	Department of Dermatology, Clatterbridge Center for Oncology
	その他著者 1	Davidson EJ	Department of Obsterics and Gynaecology, Countess of Chester Hospital NHS Trust
	その他著者 2	Davies-Humphreys J	同上
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の 6 項目	目的	乳房外 Paget 病の文献的レビュー
	データソース	Medline
	研究の選択	特定なし
	データ抽出	不明
	主な結果	乳房外 Paget 病は外陰部癌の 3～5%で、稀な疾患。診断には生検が重要。20～30%に内臓悪性腫瘍の合併があり、詳細な全身検索が必要。手術が治療の第 1 選択であるが、再発率は 40%と高く、術後も長期に亘る経過観察が必要であった。手術のほかには、放射線治療、外用または全身的化学療法、レーザー治療、光力学的治療、Mohs micrographic surgery などが試行されている。
	結論	乳房外パジェット病では、詳細な全身検索が必要で、胸部 XP・骨盤超音波・IVP・マンモグラフィーのみならず、膀胱鏡・子宮鏡・腹腔鏡・大腸内視鏡検査を施行すべきである。各種治療法の有用性を検証するためには、多施設共同の前向き無作為振り分け試験が必要である。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	清原隆宏
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（Ⅰ ） ごく最近までの文献を網羅した乳房外 Paget 病に関する最も優れた総説。しかし、参照された個々の文献はいずれも少数例の症例解析であり、各項目におけるエビデンスレベルはいずれも低いが、症例数と報告数がそれ程多くない疾患での貴重な論文である。厳密にはシステマティック・レビューではないが、現時点ではそれに準ずるものと評価した。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Perianal Paget's Disease: a histologic and immunohistochemical study of 11 cases with and without associated rectal adenocarcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ2-1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Am J Surg Pathol	
	雑誌 ID		
	巻	22	
	号	2	
	ページ	170-9	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1998	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Goldblum JR	Department of Anatomic Pathology, Division of Pathology and Laboratory Medicine, the Cleveland Clinic Foundation
	その他著者 1	Hart WR	同上
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		

一次研究の 8 項目	目的	肛囲パジェット病に対する免疫組織化学的検討	
	研究デザイン	症例対照研究	
	セッティング	Department of Anatomic Pathology, Division of Pathology and Laboratory Medicine, the Cleveland Clinic Foundation	
	対象者	肛囲原発パジェット病 6 例および直腸癌のパジェット現象 5 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 2 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）		
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	肛囲原発パジェット病 6 例中 4 例で、CK7+/CK20-/GCDFP15+、残り 2 例は CK7+/CK20+/GCDFP15-であった。直腸癌合併 4 例全例で、CK7+/CK20+/GCDFP15-であった。	
	結論	肛囲原発パジェット病と直腸癌のパジェット現象の鑑別にサイトケラチン 20 と GCDFP15 による免疫組織化学染色は有用である。とくに GCDFP15 陽性の場合、有用性は高い。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	清原隆宏	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 解析対象が少数であり、免疫組織化学染色による鑑別の精度は評価不能である。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Vulvar Paget's disease: a clinicopathologic and immunohistochemical study of 19 cases	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ2-2Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Am J Surg Pathol	
	雑誌 ID		
	巻	21	
	号	10	
	ページ	1178-87	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	1997	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Goldblum JR	Department of Anatomic Pathology, Division of Pathology and Laboratory Medicine, The Cleveland Clinic Foundation
	その他著者 1	Hart WR	同上
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	外陰部パジェット病に対する免疫組織化学的検討	
	研究デザイン	症例対照研究	
	セッティング	Department of Anatomic Pathology, Division of Pathology and Laboratory Medicine, The Cleveland Clinic Foundation	
	対象者	外陰部原発パジェット病 18 例および膀胱移行上皮癌のパジェット現象１例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 2 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 2 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）		
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	外陰部原発パジェット病16例中14例で、CK7+/CK20-/GCDFP15+、残り２例は CK7+/CK20+/GCDFP15+であった。膀胱移行上皮癌合併１例で、CK7+/CK20+/GCDFP15-であった。	
	結論	外陰部原発パジェット病と膀胱移行上皮癌のパジェット現象の鑑別にサイトケラチン20とGCDFP15による免疫組織化学染色は有用である。とくに GCDFP15 陽性の場合、有用性は高い。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	清原隆宏	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 解析対象が少数であり、免疫組織化学染色による鑑別の精度は評価不能である。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extramammary Paget's disease of the genitalia with clinically clear margins can be adequately resected with 1 cm margin	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ3-1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Eur J Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	15	
	号	3	
	ページ	168-70	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2005	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Murata Y	兵庫県立成人病センター皮膚科
	その他著者 1	Kumano K	同上
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	乳房外パジェット病の皮膚側切除マージンを検討する。	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	兵庫県立成人病センター皮膚科	
	対象者	肉眼的境界明瞭な外陰部乳房外パジェット病 46 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 1 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肉眼的境界明瞭な乳房外パジェット病に対し、皮膚側切除マージン 1cm での切除	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	46 例 359 枚の術後標本を検討したところ、腫瘍辺縁と切除縁の組織学的距離は 10.2±2.48mm (range: 4.5 to 18.5mm)であった。29 例 137 枚の術後標本を検討したところ、肉眼的境界と組織学的境界の誤差は 0.334±1.183 (range: -3.0 to +5.4mm)であった。46 例全例で局所再発はなかった。	
	結論	肉眼的境界明瞭な乳房外パジェット病の皮膚側切除マージンは 1cm で十分である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	清原隆宏	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 外用療法などの術前処置の重要性についても強調されており、肉眼的境界不明瞭な症例に対する切除マージンについては今後の検討課題である。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	Mapping biopsy 法を施行した乳房外 Paget 病 17 例の組織学的検討	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ4-1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ．システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ．1 つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ．非ランダム化比較試験 Ⅳ．分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ．記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ．患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Skin Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	14	
	号	2	
	ページ	172-7	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 1 ）	
	発行年月	1999	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	織田知明	近畿大学医学部附属病院皮膚科
	その他著者 1	山田秀和	同上
	その他著者 2	手塚 正	同上
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目			
	目的	乳房外パジェット病の皮膚側切除マージンを検討する。	
	研究デザイン	症例対照研究	
	セッティング	近畿大学医学部附属病院皮膚科	
	対象者	Mapping biopsy 法を施行した乳房外パジェット病 17 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 1 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肉眼的境界部から外側に 3cm および 6cm 離れた部分を mapping biopsy	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	組織学的に検討した。3cm 部では 136 例中 6 箇所(4.4%)で、6cm 部では 136 例中 1 箇所(0.7%)でパジェット細胞が確認された。	
	結論	乳房外パジェット病では少なくとも 3cm の皮膚側切除マージンが必要で、切除マージン決定には mapping biopsy が有用である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	清原隆宏	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 症例数は少ないが、詳細に検討された論文である。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extramammary Paget's disease: surgical treatment with Mohs micrographic surgery	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ4-2Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ．システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ．1 つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ．非ランダム化比較試験 Ⅳ．分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ．記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ．患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Dermatologic Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	51	
	号		
	ページ	767-73	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2004	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Hendi A	Department of Dermatology, Mayo Clinic
	その他著者 1	Brodland DG	Department of Dermatology, private practice
	その他著者 2	Zitelli JA	Department of Dermatology, University of Pttsburgh School of Medicine
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の 8 項目			
	目的	乳房外パジェット病に対する Mohs micrographic surgery(MMS)の有効性と必要な皮膚側切除マージンの検討	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	Department of Dermatology, Mayo Clinic	
	対象者	初発 19 例および MMS 以外の方法での切除の後に局所再発した 8 例の乳房外パジェット病	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 2 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 2 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 22 ）	
	介入（要因曝露）		
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	初発あるいは MMS 以外の手術療法の後に局所再発した乳房外パジェット病に対し MMS を施行したところ、局所再発率はそれぞれ 16%(3/19)と 50%(4/8)、5 年無腫瘍率はそれぞれ 80%と 56%であった。腫瘍細胞を消失させるのに必要な切除マージンの平均は 2.5cm、切除マージン 2cm および 5cm ではそれぞれ 59%と 97%の症例で組織学的に腫瘍消失が得られた。 また、過去の局所再発の報告を検討・比較すると、MMS の局所再発が他の標準的手術療法よりも低いことを示していた。	
	結論	MMS は他の標準的な手術療法より優れている。広範囲切除を選択する場合の皮膚側切除マージンは 5cm 必要である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	清原隆宏	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 過去の報告の検討は研究デザインが異なるため、単純に比較はできないが、よく検討された文献である。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extramammary Paget's disease of the genitalia with clinically clear margins can be adequately resected with 1 cm margin	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ4-3 Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Eur J Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	15	
	号	3	
	ページ	168-70	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 2 ）	
	発行年月	2005	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Murata Y	兵庫県立成人病センター皮膚科
	その他著者 1	Kumano K	同上
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目			
	目的	乳房外パジェット病の皮膚側切除マージンを検討する。	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	兵庫県立成人病センター皮膚科	
	対象者	肉眼的境界明瞭な外陰部乳房外パジェット病 46 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　（ 1 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　（ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　（ 22 ）	
	介入（要因曝露）	肉眼的境界明瞭な乳房外パジェット病に対し、皮膚側切除マージン 1cm での切除を施行	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑﾑ）	エンドポイント	区分
	1		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	主な結果	46 例 359 枚の術後標本を検討したところ、腫瘍辺縁と切除縁の組織学的距離は 10.2±2.48mm (range: 4.5 to 18.5mm)であった。29 例 137 枚の術後標本を検討したところ、肉眼的境界と組織学的境界の誤差は 0.334±1.183 (range: -3.0 to +5.4mm)であった。46 例全例で局所再発はなかった。	
	結論	肉眼的境界明瞭な乳房外パジェット病の皮膚側切除マージンは 1cm で十分である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	清原隆宏	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 外用療法などの術前処置の重要性についても強調されており、肉眼的境界不明瞭な症例に対する切除マージンについては今後の検討課題である。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Treatment of extramammary Paget disease with topical imiquimod cream: Case report and literature review	
	論文の日本語タイトル	イミキモドクリーム外用による乳房外パジェット病の治療：症例報告と過去の報告例の検討	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　(1)	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ6-1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅴ ）	
	Pubmed ID	16634252	
	医中誌 ID		
	雑誌名	South Med J	
	雑誌 ID		
	巻	99	
	号	4	
	ページ	396-402	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 2 ）	
	発行年月	2006 Apr	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Cohen, P. R	Dermatologic Surgery Center of Houston, Houston, TX USA
	その他著者 1	Schulze, K E	
	その他著者 2	Tschen, J. A	
	その他著者 3	Hetherington, G W	
	その他著者 4	Nelson, B R	
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		

一次研究の８項目			
	目的	乳房外パジェット病の治療における imiquimod の有効性の検証	
	研究デザイン	症例報告	
	セッティング	Dermatologic Surgery Center of Houston	
	対象者	75 歳男性白人外陰部乳房外パジェット病患者	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　（ 2 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　（ 1 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　(5)	
	介入（要因曝露）	週 3 回計 16 週 5%imiquimod クリーム外用	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑﾑ）	エンドポイント	区分
		腫瘍の消失	1.主要 2.副次 3.その他（ 1 ）
	主な結果	組織学的に腫瘍の残存はみられなかった。9 カ月後再発なし。	
	結論	乳房外パジェット病の治療に imiquimod は有用である	
	備考		
	レビューワー氏名	八田尚人	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅴ ） 対照とした病巣が 2x1.5cm と小さく、実際の臨床応用には疑問がある。考察で過去の報告例 9 例を集積しており、9 例中 7 例で完全消退、2 例で部分消退という結果であった。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Sentinel lymph node biopsy in patients with extramammary Paget's disease	
	論文の日本語タイトル	乳房外パジェット病におけるセンチネルリンパ節生検	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ7-1Web	
書誌情報	研究デザイン	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID	15458530	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Dermatol Surg	
	雑誌 ID		
	巻	30	
	号	10	
	ページ	1329-1334	
	ISSN ナンバー	1076-0512	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	Oct 2004	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Hatta N	金沢大学医学部皮膚科
	その他著者 1	Morita R	
	その他著者 2	Yamada M	
	その他著者 3	Echigo T	
	その他著者 4	Hirano T	
	その他著者 5	Takehara K	
	その他著者 6	Ichiyanagi K	
	その他著者 7	Yokoyama K	
	その他著者 8		
	その他著者 9		

一次研究の８項目	目的	乳房外パジェット病におけるセンチネルリンパ節生検の意義を調べる	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	金沢大学医学部附属病院皮膚科	
	対象者	13 人の外陰部乳房外パジェット病患者	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 1 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (15)	
	介入（要因曝露）	介入なし	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	センチネルリンパ節生検を施行した 13 例中 4 例で転移がみられ、そのうち 3 例は遠隔転移により死亡した。生検で陰性だった 9 例は観察期間中再発がなかった。	
	結論	乳房外パジェット病の治療においてセンチネルリンパ節生検は有用であることが示唆された。	
	備考		
	レビューワー氏名	八田尚人	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 乳房外パジェット病の治療にセンチネルリンパ節生検を用いた非比較研究としては最初の報告である。生検の適応や、陽性例における郭清術などの追加治療が予後を改善するかに関する研究がないので、センチネルリンパ節の有用性を結論づけることはできない。しかし、13 例と少数ではあるが、生検結果が予後とよく相関していることから、センチネルリンパ節の予後予測における有用性は認められる。本研究はセンチネルリンパ節生検がステージングの難しい例における判断材料になりうるという点で、有用であると考えられた。症例数は少ないが、比較的まとまった症例数を長期に詳細に検討しており、かつ本症の報告例が少ないことを勘案し、コホート研究に準ずるものと評価した。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	乳房外 Paget 病患者 45 人の臨床病理学的検討	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ8-1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （Ⅳ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Skin Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	16	
	号	1	
	ページ	114-119	
	ISSN ナンバー	0915-3535	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 1 ）	
	発行年月	2001	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	町田秀樹	国立がんセンター中央病院皮膚科
	その他著者 1	中西幸浩	
	その他著者 2	山本明史	
	その他著者 3	山崎直也	
	その他著者 4	野呂佐知子	
	その他著者 5	石川雅士	
	その他著者 6	石原和之	
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	腫瘍細胞の深達度と転移の有無の関係を検討する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	国立がんセンター中央病院皮膚科	
	対象者	乳房外 Paget 病患者 45 人	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 1 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 15 ）	
	介入（要因曝露）		
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（ ）
	主な結果	腫瘍細胞の深達度により IE1（2 人）,MDI（24 人）,DI（5 人）,SI（4 人）4 つに分類した.腫瘍細胞が深部へ浸潤するほど転移の頻度が増加し,予後が悪くなった.手術方法別では,術中迅速病理診断を行わずに病変を切除(CE)29 人,術中迅速病理診断を行い病変を切除(PE)9 人,機能温存術 7 人であり,予後に差は認めなかった.再発率は,機能温存術 CE,PE の順に高く,断端陽性率も同様であった。IE と MDI にはリンパ節転移を認めなかった。	
	結論	浸潤レベルが予後に最も影響する	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	八田尚人	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 腫瘍の浸潤レベルと予後を解析した研究として重要である	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外パジェット病	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	乳房外 Paget 病の診断と治療	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （　）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ9-1Web	
書誌情報	エビデンスの レベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1 つ以上のランダム化比較試験 Ⅲ. 非ランダム化比較試験 Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Skin Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	8	
	号		
	ページ	187-208	
	ISSN ナンバー	0915-3535	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 1 ）	
	発行年月	1993	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	大原国章	虎の門病院皮膚科
	その他著者 1	大西泰彦	
	その他著者 2	川端康浩	
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	乳房外パジェット病における治療法の検討	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	虎の門病院皮膚科	
	対象者	乳房外パジェット病患者 109 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず （ 1 ）	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず （ 3 ）	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず （ 15 ）	
	介入（要因曝露）	なし	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	2		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	3		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	主な結果	男女比は約2:1,外陰例が104例(triple 2,double 1を含め),肛囲 3 例,腋窩 4 例(triple 2,double 1 を含め)腹部 1 例。浸潤癌は全体の約 30%を占め,その約 40%にリンパ節転移があった。転移例のうち,両側鼠径リンパ節転移例の予後は極めて不良で全例死亡。早期浸潤癌の組織所見では腫瘍細胞が雨垂れの様に表皮から直接に散在性に滴落するのが特徴であった。	
	結論		
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	八田尚人	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅳ ） 日本の多数例を基に乳房外パジェット病の診断、治療に関して解説した優れた総説	

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外 Paget 病	
	タイプ	文献レヴュー	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extramammary Paget's disease.	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ10-1Web	
書誌情報	エビデンスの レベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1 つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ. 非ランダム化比較試験による Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅰ ）	
	Pubmed ID	15713139	
	医中誌 ID		
	雑誌名	BJOG	
	雑誌 ID		
	巻	112	
	号		
	ページ	273-279	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2005	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Shepherd V	Clatterbridge Center for Oncology
	その他著者 1	Davidson EJ	同上
	その他著者 2	Davies-Humphreys J	同上
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー部会用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外 Paget 病	
	タイプ	文献レヴュー	
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	皮膚の腺癌の化学療法・免疫療法　皮膚悪性腫瘍に対する化学療法及び免疫化学療法の適応と現状　乳房外パジェット病・汗腺癌	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ10-2Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ. 非ランダム化比較試験による Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ 1 ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	2004075693	
	雑誌名	Skin Cancer	
	対象疾患		
	タイプ	18	
	論文の英語タイトル	2	
	論文の日本語タイトル	93-98	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無		
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	エビデンスのレベル分類	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 1 ）	
	発行年月	2005	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	宇原　久	信州大学医学部皮膚科
	その他著者 1	斎田俊明	同上
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の 6 項目	目的	乳房外 Paget 病および皮膚の腺癌に対する化学療法の文献的レヴュー
	データソース	医中誌
	研究の選択	特定なし
	データ抽出	Key words　乳房外 Paget 病, 化学療法
	主な結果	乳房外 Paget 病の原発巣および転移巣に対する化学療法で長期の寛解が得られることは極めて稀であったが、VP-16、Docetaxel、CDDP+5-FU などの持続少量投与は有害反応が少なく、QOL の改善が認められることがあった。
	結論	各種治療法の有用性を検証するためには、進行期症例におけるさらなる検討が必要である。ホルモン療法、Herceptin、Bisphosphonate などが新しい治療法として注目される。
	備考	乳房外 Paget 病、CQ10,　文献 2、CQ11,　文献 1
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	高田　実
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ 1 ） 乳房外 Paget 病に対する化学療法について内外のごく最近までの文献を網羅した総説。しかし、参照された個々の文献はいずれも少数例の症例解析であり、各項目におけるエビデンスレベルはいずれも低いが、本症の報告が少ないことを勘案すると、現時点ではシステマティック・レビューに準ずるものと評価した。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外 Paget 病	
	タイプ	文献レヴュー	
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	皮膚の腺癌の化学療法・免疫療法　皮膚悪性腫瘍に対する化学療法及び免疫化学療法の適応と現状　乳房外パジェット病・汗腺癌	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　（ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ11-1Web	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ. 非ランダム化比較試験による Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ 1 ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	2004075693	
	雑誌名	Skin Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	18	
	号	2	
	ページ	93-98	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　（ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　（ 1 ）	
	発行年月	2005	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	宇原　久	信州大学医学部皮膚科
	その他著者 1	斎田俊明	同上
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

ﾚﾋﾞｭｰ研究の 6 項目	目的	乳房外 Paget 病および皮膚の腺癌に対する化学療法の文献的レヴュー
	データソース	医中誌
	研究の選択	特定なし
	データ抽出	Key words　乳房外 Paget 病, 化学療法
	主な結果	乳房外 Paget 病の原発巣および転移巣に対する化学療法で長期の寛解が得られることは極めて稀であるが、VP-16、Docetaxel、CDDP+5-FU などの持続少量投与は有害反応が少なく、QOL の改善が認められることがあった。また、ホルモン療法、Herceptin、Bisphosphonate などが新しい治療法として注目される。
	結論	各種治療法の有用性を検証するためには、進行期症例におけるさらなる検討が必要である。
	備考	乳房外 Paget 病、CQ10　文献 2、CQ11　文献 1
ﾚﾋﾞｭｰﾜｰｺﾒﾝﾄ	レビューワー氏名	高田　実
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ 1 ） 乳房外 Paget 病に対する化学療法について内外のごく最近までの文献を網羅した総説。しかし、参照された個々の文献はいずれも少数例の症例解析であり、各項目におけるエビデンスレベルはいずれも低いが、本症の報告が少ないことを勘案すると、現時点ではシステマティック・レビューに準ずるものと評価した。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外 Paget 病	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Radiotherapy for perianal Paget's disease.	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　(1)	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	ＰＣＱ１２－１Web	
書誌情報	研究デザイン	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ. 非ランダム化比較試験による Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID	12206637	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Clin Oncol (R Coll Radiol)	
	雑誌 ID		
	巻	14	
	号		
	ページ	272-84	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　(1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　(2)	
	発行年月	2002 年	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Brown RS	Middlesex 病院
	その他著者 1	Lankester KJ	同上
	その他著者 2	McCormack M	同上
	その他著者 3	Power DA	同上
	その他著者 4	Spittle MF	同上
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	肛門周囲原発 Paget 病の放射線療法の役割を検討する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	Middlesex 病院	
	対象者	肛門周囲原発 Paget 病 6 例 年齢：63～86 歳 癌の合併：4 例 レビュー（1966 年～2001 年までの英語で書かれた論文）	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　(1)	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　(3)	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　(5)	
	介入（要因曝露）	放射線療法前の治療 局所切除、5FU クリームなど 放射線療法 5 例は根治的放射線療法（36～50 Gy）、1 例は姑息的放射線療法 4 例は化学療法同時併用放射線療法（浸潤癌であったため）	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	2	生存	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	3		1.主要 2.副次 3.その他 (　)
	4		1.主要 2.副次 3.その他 (　)
	主な結果	無病生存 2 例、有病生存（肛門周囲再発）1 例、他病死 2 例、不明 1 例（Table 1） レビュー： 5 年生存率：35%（初期治療としての放射線療法）、74%（手術後の再発例に対する放射線療法）。20%（浸潤癌）、94%（非浸潤癌）。 無増悪生存 15%（癌が併存している症例）。	
	結論	放射線療法はこれまで本疾患には有効でないとされてきたが、有用性はある。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	鹿間　直人	
	レビューワーコメント	臨床データはわずか 6 例のみであるが、他の論文のレビューを詳細に検討している。(Table 2, 3, Figure 1-4)。症例集積研究とも考えられるが、詳細に検討されていること、本症の報告が少ないことを勘案して、後ろ向きコホート研究に準じるものと評価した。	

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	Paget 病	
	タイプ	レビュー	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extramammary Paget's disease	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　(1)	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	ＰＣＱ１２－２Web	
書誌情報	研究デザイン	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ. 非ランダム化比較試験による Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅰ ）	
	Pubmed ID	15713139	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Bjog	
	雑誌 ID		
	巻	112	
	号	3	
	ページ	273-279	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　(1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　(2)	
	発行年月	2005 年	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Shepherd V	Clatterbrigde Center
	その他著者 1	Davidson EJ	Countess of Chester Hospital NHS Trust
	その他著者 2	Davies-Humphreys J	同上
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビューワーコメント	目的	乳房外 Paget 病の臨床像、組織像、治療法、予後因子を明らかにする。
	データソース	Medline
	研究の選択	記載なし
	データ抽出	Medline で、Vulval Paget's, extramammary Paget's, EMPD, vulva AND Paget's and vulva AND EMPD で検索。
	主な結果	発生部位 会陰部、肛門周囲、陰茎、陰嚢など 治療法 外科療法：最も標準的治療。大きな切除範囲でも再発率は高い（34%）。浸潤癌では非浸潤癌より再発率が高かった（67% vs. 35%）。Radical vulvectomy、radical hemivulvectomy、wide local excision での再発率は、15%、20%、43%であった。切除断端陽性例の再発までの期間は平均で 1.4 年、断端陰性例では 4.4 年。 放射線療法：切除術とのランダム化比較試験はなかった。手術不能例、内科的理由による手術不能例、手術後の再発例では放射線療法が考慮された。手術単独では再発の危険性が高いと判断される場合には術後放射線療法が考慮された。 全身化学療法：手術、放射線療法の適応とならない症例に行われた。 予後因子 浸潤癌、脈管侵襲、リンパ節転移、secondary EMPD
	結論	手術療法が標準的治療であるが再発率は約 40%。放射線療法や抗癌剤クリーム、全身化学療法などが試みられている。
	備考	
	レビューワー氏名	鹿間　直人
	レビューワーコメント	よくまとまったレビューである。 レベル Ⅰ 厳密にはシステマティック・レビューではないが、詳細に検討しており、それに準ずるものと評価した。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外 Paget 病	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extramammary Paget's disease: role of radiation therapy	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	ＰＣＱ１２－３Web	
書誌情報	研究デザイン	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ. 非ランダム化比較試験による Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅴ ）	
	Pubmed ID	12060165	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Australas Radiol	
	雑誌 ID		
	巻	46	
	号	2	
	ページ	204-8	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2002 年	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Guerrieri M	Newcastle Mater Misericordiae 病院
	その他著者 1	Back MF	同上
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	乳房外 Paget 病の放射線療法の意義を検討する。	
	研究デザイン	症例報告	
	セッティング	Newcastle Mater Misericordiae 病院	
	対象者	77 歳男性 腋窩に病変（潰瘍形成を伴う、80 x 50 15 mm）	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (2)	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (1)	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (5)	
	介入（要因曝露）	放射線療法：4MV X 線、60 Gy／30 回、主腫瘤に 2 cm のマージンをつけて照射し、追加照射として 12MeV の電子線で 10 Gy／5 回追加。照射後、タモキシフェン内服。	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	2	臨床経過	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	主な結果	腫瘍は消失し、1 年経過するも再発なし。	
	結論	手術不能例や機能面を考慮し手術が望ましくない症例では根治的放射線療法は有用である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	鹿間 直人	
	レビューワーコメント	症例報告ではあるが、考察で良くまとったレビューをしている（Table 1）。レベルＶ	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外 Paget 病	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Radiotherapy for perianal Paget's disease.	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	ＰＣＱ１３－１Web	
書誌情報	研究デザイン	Ⅰ. システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ. 1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ. 非ランダム化比較試験による Ⅳ. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅳ ）	
	Pubmed ID	12206637	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Clin Oncol (R Coll Radiol)	
	雑誌 ID		
	巻	14	
	号		
	ページ	272-284	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2002 年	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Brown RS	Middlesex 病院
	その他著者 1	Lankester KJ	同上
	その他著者 2	McCormack M	同上
	その他著者 3	Power DA	同上
	その他著者 4	Spittle MF	同上
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	肛門周囲原発 Paget 病の放射線療法の役割を検討する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	Middlesex 病院	
	対象者	肛門周囲原発 Paget 病 6 例 年齢：63～86 歳 癌の合併：4 例 レビュー（1966 年～2001 年までの英語で書かれた論文）	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (1)	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (5)	
	介入（要因曝露）	放射線療法前の治療 局所切除、5FU クリームなど 放射線療法 5 例は根治的放射線療法（36～50 Gy）、1 例は姑息的放射線療法 4 例は化学療法同時併用放射線療法（浸潤癌であったため）	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	2	生存	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	主な結果	無病生存 2 例、有病生存（肛門周囲再発）1 例、他病死 2 例、不明 1 例（Table 1） レビュー： 5 年生存率：35%（初期治療としての放射線療法）、74%（手術後の再発例に対する放射線療法）。20%（浸潤癌）、94%（非浸潤癌）。 無増悪生存 15%（癌が併存している症例）。	
	結論	放射線療法はこれまで本疾患には有効でないとされてきたが、有用性はある。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	鹿間 直人	
	レビューワーコメント	臨床データはわずか 6 例のみであるが、他の論文のレビューを詳細に検討している。(Table 2, 3、Figure 1-4)。症例集積研究とも考えられるが、詳細に検討されていること、本症の報告が少ないことを勘案して、後ろ向きコホート研究に準じるものと評価した。	

一次研究用フォーム		データ転入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外 Paget 病	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extramammary Paget's disease of the perineal skin: role of radiotherapy	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　(1)	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	ＰＣＱ１３-２Web	
書誌情報	研究デザイン	Ⅰ．システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ．1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ．非ランダム化比較試験による Ⅳ．分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ．記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ．患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （　Ⅳ　）	
	Pubmed ID	1324902	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Int J Radiat Oncol Biol Phys	
	雑誌 ID		
	巻	24	
	号	1	
	ページ	73-8	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　(1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　(2)	
	発行年月	1992 年	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Besa P	MD アンダーソン癌センター
	その他著者 1	Rich TA	同上
	その他著者 2	Delclos L	同上
	その他著者 3	Edwards CL	同上
	その他著者 4	Ota DM	同上
	その他著者 5	Wharton JT	同上
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	乳房外 Paget 病の治療成績を解析する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	MD アンダーソン癌センター	
	対象者	65 例に乳房外 Paget 病患者 男性 13 例，女性 53 例 平均年齢 66 歳（38～91） 部位：会陰部 47 例、肛門周囲 11 例、陰嚢 7 例 病理組織：Paget 病のみ 43 例、浸潤性腺癌の成分あり 22 例 腫瘍径：4 cm 未満 8 例、4 cm 以上 31 例、他不明	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　(3)	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　(3)	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　(14)	
	介入（要因曝露）	Group 1（Paget 病のみ） 38 例：手術単独療法, 3 例：放射線療法単独, 2 例：切除＋放射線療法 Group 2（腺癌成分あり） 9 例：手術単独，5 例：手術＋放射線療法，4 例：放射線療法単独 放射線療法：40-60 Gy,化学療法は 4 例に施行	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	2	生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	3		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	主な結果	30 例の Paget 病成分のみの症例で切除単独治療を受けた症例の局所再発率：40%。初期治療として治療された Paget 病成分のみの症例で本疾患による死亡例なし。3 例の根治的放射線療法(56 Gy)投与例はすべて制御。腺癌成分を有する症例の手術単独治療での局所再発率は 75%。3 例の手術＋放射線療法で治療された症例はすべて制御。	
	結論	合併症などのために手術ができない症例では 50 Gy 以上を投与すべき。手術単独では局所再発しやすい症例では術後放射線療法として 55 Gy 以上を投与すべきである。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	鹿間　直人	
	レビューワーコメント	Group 2 の治療内容の記載が曖昧で治療内容を把握しにくい。 レベル Ⅳ	

一次研究用フォーム		データ転入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外 Paget 病	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extramammary Paget's disease: Role of radiation therapy	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し　(1)	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	ＰＣＱ１３－３Web	
書誌情報	研究デザイン	Ⅰ．システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ．1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ．非ランダム化比較試験による Ⅳ．分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ．記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ．患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 （　Ⅴ　）	
	Pubmed ID	12060165	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Australas Radiol	
	雑誌 ID		
	巻	46	
	号	2	
	ページ	204-8	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他　(1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他　(2)	
	発行年月	2002 年	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Guerrieri M	Newcastle Mater Misericordiae 病院
	その他著者 1	Back MF	同上
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

一次研究の８項目	目的	乳房外 Paget 病の放射線療法の意義を検討する。	
	研究デザイン	症例報告	
	セッティング	Newcastle Mater Misericordiae 病院	
	対象者	77 歳男性　陰嚢に病変（潰瘍形成を伴う、80 x 50 15 mm）	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず　(2)	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず　(1)	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず　(5)	
	介入（要因曝露）	放射線療法：4MV X 線、60 Gy／30 回、主腫瘤に 2 cm のマージンをつけて照射し、追加照射として 12MeV の電子線で 10 Gy／5 回追加。照射後、タモキシフェン内服。	
	ｴﾝﾄﾞﾎﾟｲﾝﾄ（ｱｳﾄｶﾑ）	エンドポイント	区分
	1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	2	臨床経過	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	3		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	4		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	5		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	6		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	7		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	8		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	9		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	10		1.主要 2.副次 3.その他（　）
	主な結果	腫瘍は消失し、1 年経過するも再発なし。	
	結論	手術不能例や機能面を考慮し手術が望ましくない症例では根治的放射線療法は有用である。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	鹿間　直人	
	レビューワーコメント	症例報告ではあるが、考察で良くまとったレビューをしている（Table 1）。レベルⅤ	

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外 Paget 病	
	タイプ	ガイドライン（取扱い規約）	
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	皮膚悪性腫瘍取り扱い規約	
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ14-1Web	
書誌情報	エビデンスの レベル分類	Ⅰ．システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ．1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ．非ランダム化比較試験による Ⅳ．分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ．記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ．専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅵ ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	皮膚悪性腫瘍取扱い規約 ２００２年６月第１版	
	雑誌 ID		
	巻		
	号		
	ページ	58-71	
	ISSN ナンバー	ISBN 430740033	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 1 ）	
	発行年月	2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者		日本皮膚悪性腫瘍学会/編
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の６項目	目的	取り扱い規約
	データソース	記載無し
	研究の選択	記載無し
	データ抽出	記載無し
	主な結果	（経過観察法について） 根治手術がなされた場合の乳房外 Paget 病（表皮内癌、微小浸潤例）の５年生存率は、どの報告でも 90%以上。 浸潤癌では全身検索が不可欠。
	結論	表皮内癌、微小浸潤例では、原発部、局所リンパ節部を中心に１年目は１～3ヵ月毎、２、３年目は3～4ヵ月毎、４年目以降は６ヵ月毎程度でよい。浸潤癌では一般検査は３ヵ月毎、胸部Ｘ線は3～6ヵ月毎、腹部エコーは６ヵ月毎～１年毎程度に行う。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	古賀 弘志
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ Ⅵ ） エキスパートオピニオンである。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	乳房外 Paget 病	
	タイプ	文献レヴュー	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Extramammary Paget's disease.	
	論文の日本語タイトル		
診療ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ情報	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝでの引用有無	1.有り 2.無し （ 1 ）	
	ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝ上での目次名称	PagetCQ14-2Web	
書誌情報	エビデンスの レベル分類	Ⅰ．システマティック・レビュー／メタアナリシス Ⅱ．1つ以上のランダム化比較試験による Ⅲ．非ランダム化比較試験による Ⅳ．分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） Ⅴ．記述研究（症例報告やケースシリーズによる） Ⅵ．専門委員会や専門家個人の意見 （ Ⅰ ）	
	Pubmed ID	15713139	
	医中誌 ID		
	雑誌名	BJOG	
	雑誌 ID		
	巻	112	
	号		
	ページ	273-279	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 （ 1 ）	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 （ 2 ）	
	発行年月	2005	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Shepherd V	Clatterbridge Center for Oncology
	その他著者 1	Davidson EJ	同上
	その他著者 2	Davies-Humphreys J	同上
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

レビュー研究の６項目	目的	乳房外 Paget 病の文献的レヴュー
	データソース	Medline
	研究の選択	特定なし
	データ抽出	Key words(Extramammary Paget's disease, vulva, Paget's)
	主な結果	乳房外 Paget 病は外陰部癌の 3～5%で、稀な疾患。診断には生検が重要。20～30%に内臓悪性腫瘍の合併あり。手術が治療の第 1 選択であるが、再発率は 40%と高く、術後も長期に亘る経過観察が必要であった。手術のほかには、放射線治療、外用または全身的化学療法、レーザー治療、光力学的治療、Mohs'顕微鏡手術などが試行されていた。
	結論	各種治療法の有用性を検証するためには、多施設共同の前向き無作為振り分け試験が必要である。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	高田 実
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（Ⅴ ） ごく最近までの文献を網羅した乳房外 Paget 病に関する最も優れた総説。しかし、参照された個々の文献はいずれも少数例の症例解析であり、各項目におけるエビデンスレベルはいずれも低いが、本症の報告が少ないことを勘案すると、システマティック・レビューに準じるものと評価した。